

高知市立

自由民権記念館紀要

No.29

2025. 3

(令和 7)

○資料紹介

森田友和関係資料について…………… 村中 大樹

高知市立自由民権記念館

森田友和関係資料について

村 中 大 樹

一 はじめに

太平洋戦争が終わって間もない期間にブラジルと日本（高知）を結ぶ活動を行っていた森田友和氏（以下、敬称略）の資料群が、高知市立自由民権記念館に寄贈されている。筆者は二〇二一年九月以降、資料整理と目録の作成を同館から依頼され、本稿はその成果報告である。

森田友和は、一九三〇年八月一九日、高知県高岡郡波介村（現在の土佐市）に生まれた。一九三四年に両親兄弟とともに三歳でブラジルに渡り、サンパウロ市近郊で子ども時代を過ごしている。戦前、高知県からブラジルへの移民は延べ四六八〇人を数える。このうち、高岡郡と吾川郡を中心に一一八一人がサンパウロ市近郊の「コチア駅(Estação Cotia)」へと配耕^一されたため、一時、コチア周辺は高知県出身者が多く集住していた^二。波介村からの移民も一一四人（一九世帯）を数え、森田一家もこのうちの一世帯に数えられる。ただ、一家はブラジルに定住せず、長兄・長姉の二人を残して一九四一年には帰国。森田自身も一九四一年二月に両親より一足早く次兄とその友人に連れられて帰国している^三。帰国後の森田は波介国民学校へ編入学。その後、高知県立海南中学校に進学。戦時中は越知への疎開や敗戦後は「残務整理」や南海地震を経験した。一九四七年頃からは小学校の代用教員、さらに社団法人高知県貿易協会^四の嘱託職員として働き始めている。

その後、一九五七年―一九五八年頃に森田は上京したとみられ、一九六二年頃には東京でカメラ関係の企業に就職している^五。会社が複写機事業を拡大した一九七五年頃に独立、東京都杉並区荻窪にOA機器^六の代理店を開業、親会社が経営統合した二〇〇三年頃まで自営業を営んでいる。その後二〇〇七年頃に東京・千葉での生活に区切りを付け、故郷高知に移住、二〇二〇年八月に亡くなっている。

筆者は二〇一四年七月に初めて森田と出会い、以後、二〇二〇年八月に森田が亡くなるまで関係性を築いてきた。とくに、早稲田大学の修士課程に在籍していた二〇一四年七月からおよそ一年半に亘る期間、一調査者として断続的な聞き取りと森田が所有する資料の撮影をおこない、その後、調査成果をまとめている^七。森田は筆者以外にも移民に関心のある学生や研究者に対し調査協力をおこなっており、とりわけブラジル移民史研究にとって重要な情報提供者であったことが指摘できる（第四章に後述）。

今回整理の対象となった資料は、森田が公的機関に寄贈した資料のうち、主として二〇一九年八月に高知市立自由民権記念館へと寄贈されたものである。この寄贈には筆者も関わり、その後、同館より資料整理の依頼を受けることになる。「森田友和関係資料」と名付けられる資料は、特定の個人の活動にもなっており発生した個人記録ないし個人文書であり、個人や家族の記録が蓄積された資料群といえる^八。以下では、第二章でまず資料整理の概要説明をおこなう。寄贈の経緯と整理の流れと生じた課題、細目録の作成について述べたい。第三章では作成した細目録から資料の構成について確認する。第四章では資料を理解するための「ガイド」として、森田の活動歴の紹介をおこなう。

二 資料整理の概要

（１）寄贈の経緯

本章では、まず寄贈の経緯について述べたい。森田が所有する資料の公的機関への寄贈は、これまでに計四回おこなわれている。一回目は二〇〇九年に水野龍の直筆書簡の写しが佐川町立青山文庫に、二回目は二〇一四年に蔵書のうち移民関係書籍が佐川町立図書館へ寄贈されている。三回目は二〇一六年に『在伯同胞活動実況大写真帖』一点が、同年に開催された企画展の展示史料として開催館である自由民権記念館に持ち込まれ、その後、寄贈の手続きを踏んでいる。二〇一九年の寄贈（四回目）は、森田が自宅の「資料庫」と座卓まわりに保管していた「資料」を、病気のため入院中の本人に代わり筆者が搬出、自由民権記念館へ搬入をおこなった。搬入時、同館所属の学芸員と現状記録のための撮影と点数（概数）の確認、その際、仮番号の付与と

資料保存箱への保存を済ませていた。ただし、これ以降の整理については、筆者の大学院進学にともなう転居や新型コロナウイルス感染症の影響により、二〇二一年以降となった。

(2) 整理の流れと課題

二〇二一年九月に資料の整理を再開した筆者は、資料保存箱に入れられたままとなっていた資料を取り出し、中身の確認をおこなった。資料は一点モノ以外に封筒やファイル、プラ袋、レターケースといった容器に入れられていた。仮番号は、二〇一九年の時点で単体または容器ごとに大きく振り分けされており、容器内の資料については追加で枝番号を付す必要があった。ただ、整理といっても、それには物理的整理と情報的整理の二つが考えられる^九。

今回の整理では、搬入時の原秩序を尊重しつつ、内容物の入れ替えや資料そのものに対する物理的な整理は最小限に留め、資料から情報収集をおこない目録化する情報的整理をおこなっている。ただし、情報的整理では、段階的整理の考え方でいう概要目録の作成ではなく、資料一点ごとの細目録の作成に近いかたちとなった。それには以下の理由がある。

まず、森田友和関係資料は、あらかじめ第三者に保存・利用されることを意識して整理されておらず、第三者にとつては本人による分類の意図が必ずしも明確でないことである。資料はさまざまな容器に入れられており、なかには本人によるメモ書きが残されているものもあったが、メモ書きは必ずしも内容物を的確に示したものではなかった。たとえば、「西原清東翁(写真、経歴・伝記資料)」と本人のメモ書きがある封筒には関係する資料が一部確認できるが、同様の資料は他の複数の容器にも確認できる。言い換えれば、同じ容器内に複数ジャンルの資料が混在しており、本人によるメモ書きがある封筒とは別の場所に該当の資料が入れられているケースがいくつもあった。つまり、森田による容器ごとの「分類」は、一度限りの整理ではなく、その時々都合や入れ替え等の結果によるものと考えられ、場合によっては、整理者による入れ替えをした方が第三者にとつては分かりやすいと感じられることもあった。

二つ目に、森田友和関係資料は、資料のジャンル、形態、さらには作成年や作成場所といった項目の違いから容易に分類できる資料群ではない。森田

資料には、書簡や自筆のノート、写真、趣意書類といった比較的「原資料」と捉えられるものに加えて、書籍や会誌、会報、新聞の切抜、チラシなどの案内文書、文房具などの事務用品、さらには、電子式複写による複製物が多くみられた^{一〇}。いわゆる「写真」であっても印画紙に紙焼きされたものやデジタルプリントされたもの以外に、原資料を複写し切り抜いたものが多く含まれる。これは、同じ「写真」というジャンルでも形状が異なるだけでなく、作成年が異なってくる。また作成年が同年代の写真であっても最近撮られたものと昔撮られたもののコピーであれば――すなわち、原本がいつ撮影されたものであるかによって、そこから示される主題内容は複数のコンテキストを有しているといえる。

さらに、本人所蔵であったが、現在は原資料の所在が確認できないものが一定数あることも問題であった。これには筆者が二〇一四年七月―二〇一五年一月にかけて本人了解のもと撮影又は借り受けデジタル化した資料^二も含まれる。失われた原資料のなかには、生前に森田が重要視していたものや研究者の立場からも資料群の中核をなすと判断されるものが含まれている。これらはデジタル化以降に紛失または破棄されたものがあることを意味しており、現在は資料群もしくは筆者が撮影したデータのなかの複製物しか遺されていないということになる。これは、本人以外の他者から提供を受けたものや他機関が所有する資料の複製物とは性質が異なる。

つまり、森田友和関係資料は、森田による分類をそのまま利用できるものではなく、また、ジャンル、形態、作成年や作成場所といった項目から演繹的に主題分類できる資料群ではないことがあげられる。言い換えれば、森田個人という主体を中心に、幅広い年代で複合的なコンテキストをもつ資料群である。こうした資料を整理するとき、資料群の概要というよりはむしろ資料一点ごとの詳細情報を含む目録を作成し、本人の来歴をガイドとして付すことが重要だと考えた^{二三}。細目録の作成では、仮番号・資料種別・資料形態・資料名・内容詳細・年代注記など項目を設定し情報収集をおこなった。その結果、資料は七六三件を数えた^{二四}。

三 資料について

本章では資料の構成についてみていきたい。

まず資料形態ごとに整理した場合、一筆箋、印画紙、折り加工紙、紙袋、ガラス乾板、切手、罫紙、原稿用紙、コピー用紙、冊子、更半紙、紙片、アルバム、収入印紙、定規、新聞（切抜）、短冊、地図、荷札、ノートブック、はがき、ポストカード、抽斗、ビニール袋、便箋、封筒、フォトフォルダ、プラケース、ブラ袋、ペーパーファスナー、無地用紙、名刺、メモ用紙、ラベルシール、リングファイル、レバーファイル、レポート用紙、レポート箋、和紙、封筒など、多岐にわたり分類可能である。

続いて資料種別ごとの整理では、会誌、会報、切手・証紙、広報、雑誌、雑誌記事、事業報告書、自筆資料、写真・アルバム、書簡、書籍、新聞、新聞記事、図録、地図、チラシ、複写資料、文書類、保存容器、メモ類、論文抜刷、文房具・事務用品、リーフレットなどに分けられた。

このうち書籍については、蔵書のうち移民関係書籍のほとんどが、既に佐川町立図書館へと寄贈されている。今回の細目録には、森田が最期まで所有していた移民関係の貴重書四件が含まれている^{一四}。『在伯同胞活動実況大写真帖』はそのうちの一件である。その他の資料種別については、本人または親族宛の書簡や写真・アルバムを筆頭に、筆写・抜書資料、文書類のなかに森田が作成したとみられるB5判ノートや森田らが中心となり作成に関わった「財団法人高知ブラジル協会設立趣意書」など、原本性のあるものが残されている。それ以外には、森田が後年に集めた、もしくは作成したと思われる複製物や、その他第三者にはごく一般的な個人の所有物とされるものが確認できる。

つぎに、主題別の構成に触れたい。今回の整理では、森田の来歴を年代別に捉え、そこから大まかに分類をおこなった。ただし、写真アルバムなど資料によっては明確な分類を定めることが難しく、AからDのいくつかの分類にまたがるものもある。また、ここでの記述は各分類ごとに主要な資料の概要にとどめ、背景にかかる説明は第四章に詳述した。

A ブラジル関係資料

ブラジル関係資料は、森田の幼少期から青年期にかけての家族関係の資料、とくに一九四一年の日本帰国から戦争直後にかけての写真と、戦後もブラジル側に残った森田の長兄・長姉家族に関係した写真を含む。主要なものには、ブラジルで家族や友人・知人によって撮影された写真や、戦前または戦争直後の写真が収められた「森田友和旧蔵アルバム」がある。アルバムには、帰国間近のブラジル・サントス港で撮影された写真や送迎会の写真、さらに帰朝船「もんでびでお丸」の甲板上で撮影された写真やそこに乗り合わせた人びと^{一五}の写真が残されている。これら写真からは、帰国後の森田の活動に関係する人物^{一六}の姿も確認でき、森田を取り巻く人間関係を伺い知ることができる。

B 高知での活動に関する資料

次に、高知での活動に関する資料は、森田が代用教員ならびに貿易協会の嘱託職員として勤務、ブラジル二世クラブでの活動を経て、上京するまでの森田の活動に関する資料である。

B-I 文通関係（書簡類）

主として一九四六年～一九五二年に亘る文通活動で残された書簡である。書簡は五六通の所在が確認でき、森田本人または家族宛にブラジル側から送付されたものである。森田本人の書簡の写しは残っていない。

B-II 水野龍関係資料

主として一九四七前後～一九五〇年にかけての水野龍との親交および再渡伯への協力に関係する資料である。水野龍は一九〇八年にブラジル移民を初めて手がけた人物として知られる。関連する重要資料には、佐川町立青山文庫に寄贈された水野の直筆書簡（カーボン複写）がある。森田友和関係資料には直筆書簡と同時代の資料として水野と森田の写真のほか、一九五〇年に水野がブラジルへ再渡航を果たす前の写真が残されている。残念ながら原資料の多くが失われていると考えられ、後年、森田または筆者によって複製された資料にそれが確認できる。このほか、後年寄贈を受けて所有していた

と思われる資料を含む。

B-III ブラジル二世クラブ関係資料

主として一九四八年～一九五二年に活動していた、戦前期ブラジルから日本へ帰国または渡航していた青年たちのグループであるブラジル二世クラブに関係する資料である。ブラジル二世クラブは、森田ら六名が代表を務め、嘱託職員として勤務していた高知県貿易協会に住所が置かれた。主要な資料には、森田を含むブラジル二世クラブ員や、クラブの幹旋で再度ブラジルへ渡航する人物を撮した写真、これら写真を収めたアルバム、当時の高知新聞に掲載された記事などが残される。このほか、「高知ブラジル協会設立趣意書」や「高知県海外協会設立趣意書」など五つの文書類が残されている。これら文書類のなかには、森田らブラジル二世クラブが中心となり作成されたと考えられるものが存在する。

B-IV 西原清東顕彰関係資料

主として一九六〇年～一九六四年頃にかけての西原清東顕彰運動に関する資料である。西原清東は高知県出身の代議士、同志社社長などを経て渡米後、テキサスで西原農場を開設、米作で成功した人物として知られる。主要な資料には、西原清東研究のため森田が作成したB5判ノートや原稿用紙のほか、「西原清東伝記分類」と題された研究会発表用のプリント、そのときに撮影された写真などが確認できる。また、後述する西原清東の顕彰運動に関係し、西原農場で働いた経験のある片岡光清^{一七}から譲り受けたと思われる資料が含まれる。譲渡資料の中には、西原清東の肖像写真（紙焼きとガラス乾板）をはじめとする写真類、片岡による手稿などが確認できる。さらに、一九六三年一月に土佐市で開催された西原清東顕徳碑除幕式の様子やそれにあわせて来日した西原正顕^{一八}夫妻を撮した写真などが残される。

C 二〇〇八年以降の活動に関する資料

森田は二〇〇七年の初め頃、関東地方から故郷である高知県に転居している。ここには、おもに二〇〇八年以降の活動と関係して蒐集または作成され

た資料を分類している。森田が訪問先で撮影した写真や、訪問先での蒐集資料、新聞記事、メモ、研究者などから提供を受けた資料が含まれる。また、AやBに分類した複製資料で、二〇〇八年以降の活動に関連して作成されたと考えられるものについては重複してCに分類した。

D その他の資料

ここには、AからCの分類に属さないもの、現段階で脈絡の不明なメモや写真、チラシ、リーフレット、会報などの逐次刊行物、企画展の案内や図録、新聞記事、文献等の複写物、さらには文房具類といった、いわば「雑録」ともいえるものが含まれる。一九六〇年初頭に東京都内で撮影されたと思われる森田の写真や、一九七六年～二〇〇五年にかけて森田がブラジルへ渡航した際に撮影されたと思われる写真・アルバム、二〇〇八年以降に撮影されているが活動とは無関係と考えられる写真などもDに含めた。

以上、資料の構成について資料形態、資料種別、主題別にそれぞれ概略を述べてきた。繰り返しになるが、主題別による分類は資料によっては複数の分類にまたがる場合がある。これは資料が森田を中心に幅広い年代で複数のコンテンツを有しているからにほかならない。そこで次章では、これらの資料群のうち、とくにB・C（D）を理解するためのガイドとして、残された資料と聞き取りデータから把握できる森田の活動歴を紹介しておきたい。

四 森田の活動歴

森田の活動は、大まかに一九四六年～一九六四年頃にかけての活動（①④）と二〇〇八年以降の活動（⑤）に分けて考えることができる。

① ブラジル関係者との文通の開始…一九四六年～一九五二年（B-Ⅰ）

森田の活動において特筆すべき点の一つめは、敗戦からサンフランシスコ平和条約が締結される一九五二年までの期間に、在ブラジル関係者との間で

積極的な文通を行っていることである。一九四六年九月の外国郵便の再開とともに、同年一〇月には、早くもサンパウロ市の大平清実から同郷者に宛てた書簡が届いている。差出人の大平清実は、森田と同じ波介村出身の移民で、当時、コチア産業組合中央出張所所長であり、後に下元健吉の跡を継ぎ専務理事となった人物である。森田が暮らしていたサンパウロ近郊の高知県出身者にとっては現地で活躍する先輩の一人であった。大平の手紙からは、同郷者に向けて日本の現状を気遣うとともに、ブラジルの状況を知らせる旨の内容が確認できる^{一九}。また、一九四七年五月には、同様の内容で森田が帰国する際、引率者であった馬場謙介からの書簡が父国治宛に届いている^{二〇}。馬場は移民二世としてサンパウロ州内陸部の東京植民地に生まれ、外務省留学生として板橋師範学校（現・東京学芸大学）に留学、その後商社勤務やジャーナリズムの分野で活躍した人物である。戦後、ブラジルに帰国できなくなった移民二世の帰国促進運動の中心人物でもあった^{二一}。

これら書簡に森田はいち早く反応し返事を書いたと考えられる。一九四七年一〇月二日以降、森田宛の書簡は筆者が撮影したものだけで九〇通^{二三}あり、大平はじめブラジル側との書簡のやり取りは一九五二年まで続けられた。とくに、太平洋戦争終結後、ブラジル日系社会では「勝ち組・負け組抗争」と呼ばれる日本人移民間での対立が社会問題となっていた。戦時中、サンパウロ州の人口の急激な増加にともない著しい成長を遂げていたコチア産業組合は、この混乱において認識運動^{二三}の旗振り役を担っている。大平は、このような状況下で、慰問物資の正確な配送とともに、郷里高知からブラジルの同胞へ向けて日本敗戦の正確な情報を親族に向けて送って欲しいと書簡のなかで頼んでいる^{二四}。森田はブラジル側とのやり取りを重ねるなかで積極的に高知新聞へ情報提供も行っている^{二五}。とくに後述③の活動に関するやり取りも含めて、森田による文通は、私的な内容のやり取りというより、むしろ公的な情報共有を担う者としての役目を意識していたものといえるだろう。

② 水野龍との親交及びブラジル再渡航への協力…一九四七年頃カー―一九五〇年（B―II）

二つめは、水野龍との親交とブラジル再渡航への関与である。

水野龍は、高知県高岡郡佐川町出身。一九〇八年に「笠戸丸」移民を送り出した皇国殖民合資会社の創設者として知られる人物である。水野は一九三七年、ブラジルのパラナ州ボンタ・グロッサに「コロニア・アルボラーダ（土佐村）」を建設、不足する資金調達のためブラジルに戻れずに故郷の高知に滞在していた^{二六}。森田は、予てより両親から帰国の際に水野と同船であったことを聞かされていた。また、敗戦後の新聞報道で水野の所在を知り、高知市小石木の種田家^{二七}に滞在する水野を訪ねていったと証言している。水野はブラジルに残してきた息子と同じ歳であった森田の訪問をとて喜んで迎えてくれたといい、以後、水野が日本を発つまでの間、親交を深めている。日伯協会の常任理事を務めた原梅三郎の記述によれば、一九五〇年、原のもとに水野からブラジルへの再渡航を懇願する旨の書簡が届き、原は高知まで水野を訪ねている。その後の経緯として、原の呼びかけと同年三月にブラジルの日系社会で龍翁帰伯後援会（以下、龍翁会）が結成されていることが確認できる^{二八}。原をはじめ、東京ならびに高知の旧知、高知県知事、さらに龍翁会といった日本・ブラジル双方の支援を受け、水野は一九五〇年五月にブラジルへ再渡航を果たしている。森田の資料には、一九五〇年三月に高知商工会議所で開かれた水野龍の送別会の様子を撮影した写真が残されている。さらに、水野がブラジルへ渡航する際、森田は高知から神戸を経て東京滞在までを同行^{二九}、高知港出港の様子は高知新聞に紹介^{三〇}されている。

③ 「ブラジル二世クラブ」代表としての活動…一九四八年―一九五二年（B

Ⅲ)

三つめは、ブラジル二世クラブの代表としての活動である。

ブラジル二世クラブは、一九四八年九月、森田と同じく戦前に帰国（「帰朝」とよばれた）または渡航し、戦時中はブラジルに残った家族と離れて暮らす青年たちにより結成されたグループである。ブラジル二世クラブは、森田が嘱託を勤めていた高知県貿易協会内に住所が置かれ、代表は森田らが務めていた。主な活動は、占領期にあつてブラジルへ渡航または帰国（「帰伯」と呼ばれた）を目指す青年の支援ならびに日本へ一時帰国するブラジル移民との情報交換や物品のやり取りにあつた。特筆すべき点は、東京でブラジル日系二世の集いである「南桜会」を結成したとされる馬場謙介（森田の帰国時の引率者）や、ブラジルと日本との間で生き別れになっていた二世らの世話をしていた組織「青空会」代表と連絡を取り合っていたことである。青空会代表は、広島にいる二世が帰国の準備を進めているもののブラジルにいる両親が「勝ち組」であるため、帰国することができずに困っているから様子を見に行つてほしいとサンパウロから森田に書簡を送っている^{三二}。

ブラジル二世クラブの名称は、一九五〇年一月一〇日付から一九五二年三月一日付に至る期間、高知新聞の紙面にたびたび登場しており、一九五〇年三月には、コチア産業組合の依頼で南国高知産業大博覧会へ出品物を斡旋している他、ブラジルから一時帰国した高知県出身者に記録映画など物品の引き渡しをおこなっている様子がわかる。その後も、大平清実を介したブラジル側の情報の伝達や、近親者の呼び寄せのため帰国した移民に対し高知新聞社主催で座談会を実施する等活動が確認できる^{三三}。

なお、一九五二年一月二十九日付の高知新聞からは、ブラジル二世クラブが「（サンフランシスコ）講和条約批准を機会に解散」、「今後さらに強力な組織「海外協会」（仮称）の誕生を計画している」ことがわかる^{三四}。今回、自由民権記念館に寄贈された資料には、「高知ブラジル協会設立趣意書」二

点のほか、「高知ブラジル二世クラブ代表」と六名の氏名が記載された文書、「財団法人 高知ブラジル協会寄附行為」、「会員及び賛助員規定」、「高知県海外協会設立趣意書」（計六点）が残されている。このうち、高知ブラジル協会設立趣意書には、「文化の使徒として祖国に留学せしむる伯国二世たち」が「その特殊な立場と責務を痛感し、先にブラジル二世クラブを結成」したという記述が確認できる。これら文書類の詳細については不明な点も多いが、高知ブラジル協会の設立に向けた動きにブラジル二世クラブが積極的に関わっていたことがうかがえる^{三四}。

④西原清東顕彰にかかる活動…一九六〇年頃カ―一九六四年（B―IV）

四つめは、西原清東顕彰にかかる活動である。

森田はクラブ解散後もしばらくは代用教員ならびに貿易協会の嘱託として働いていたと思われる。一九五三年以降の森田に関する情報は乏しく、その後の動向は不明な点も多いが、本人の証言によれば森田が二十七歳の時（一九五七年―一九五八年頃）、高知を離れて上京、カメラ関係の会社に就職した前後の一九六二年には新宿区西落合に居住していたことがわかる。ただ、上京後も森田はたびたび高知に帰省していた。また、この間にも、ブラジルに留まらない郷里の「移民」関係者と連絡を取っていたものと思われる。例えば、一九六〇年六月二五日に土佐市中央公民館で開かれた「郷土史研究会の六月例会」には森田が西原清東について詳しく知っているという理由で、郷土史研究会会長の馬淵重馬^{三五}の依頼で研究報告をおこなっている。報告で森田は自身の研究成果を発表。このとき作成した「西原清東伝記分類」と題されるガリ版刷りのプリントが資料群に残されている。

西原清東は、高知県高岡郡出岡村出身。立志学舎、神田茂松学校で学んだ後、司法代言人（弁護士）、代議士、同志社社長などを経て渡米、テキサスで西原農場を開設、南部一帯に米作産業を興し、後に「ライス・キング」と

呼ばれた人物である。西原清東顕彰する動きは、一九六四年発行の伝記『巨人 西原清東』に確認できる^{三六}。を伝記を発行した西原清東先生顕徳碑建設期成会（以下、期成会）によって一九五五年以降に顕彰活動が開始され、一九六三年一月には土佐市内に顕徳碑が完成、一二月に除幕式がおこなわれている^{三七}。伝記は、毎日新聞記者を勤めた猪野正義が期成会から依頼され執筆したものである。森田の証言によると、伝記を執筆した猪野は、森田がブラジルから帰国する際の引率者の一人であった猪野博のおじにあたる人物であった。伝記の序文には当時の土佐市長であり期成会会長の山本信光の他、元外交官で書生時代に西原と親交のあった野田良治^{三八}、さらに、長兄が笠戸丸移民としてブラジルへ渡り、自身も渡米後、西原農場で働いた経験のある片岡光清の三名が寄稿している。片岡光清、猪野正義が森田の発表した研究会にも参加していたことは注目に値するだろう。

⑤「ブラジル日本移民百周年」への参加以降の活動…二〇〇八年―二〇〇九年（C＋D）

五つ目は、ブラジル日本移民百周年にあわせた渡伯とその後の活動である。二〇〇八年六月四日、森田は生涯最後となる五度目のブラジル渡航^{三九}を果たす。この年は、神戸港を出帆した笠戸丸が一九〇八年六月一八日にサントス港に到着してから一〇〇年の節目にあたり、日伯両国で数多くの記念行事が催されていた。興味深いのは現地邦字紙『サンパウロ新聞』の六月二八日付ならびに七月三十一日付の二面記事に森田のことが大きく紹介されていることである^{四〇}。六月二八日付の記事からは森田の渡航の目的が水野龍の「良くないイメージを払拭」することにあつたことがわかる。すなわち、当時の高知県知事による水野龍の墓参を実現させ。水野に対するコロナ内での否定的評価を払拭、その名誉を回復すること。そして帰国後に予定されていた高知県内での企画展に向けた準備である。水野は一九〇八年、笠戸丸移民を引率した

人物として「移民の祖」と称される一方で、移民事業の失敗や預かり金問題によって、日系社会では長らく批判的に捉えられていた^{四一}。七月三十一日付の記事には、森田が「生前の水野氏と会った唯一の生き証人」として紹介され、水野が家族・親戚宛に書き送った手紙のコピーを持参していることが確認できる。二〇〇九年八月二五日付の高知新聞には、森田がこのとき持参した五〇〇枚に及ぶ水野のカーボン複写の書簡群と毛筆の色紙が佐川町立青山文庫に寄贈されたことが紹介されている。記事には森田が「龍が日本に帰国中の戦中戦後の九年間、家族ぐるみの付き合いがあり、ブラジルに戻る直前の龍から「いつか役立ててほしい」と手紙類を託された」とあり、また寄贈によって「肩の荷が下りた。新しい世代の研究に期待したい」と「安堵（あんど）した表情」を浮かべたことが書かれている^{四二}。

その後も森田は筆者を含め移民に関心のある学生や研究者へ調査協力をおこなっている。たとえば、二〇〇九年一月一三日に提出された卒業論文^{四三}への協力をはじめ、二〇一一年に神戸市の「海外移住と文化の交流センター」（以下、交流センター）で開催された企画展への調査協力^{四四}、二〇一六年にはエッセイストの寺尾紗穂による連載記事に「水野の実際と功績を訴えた」人として、森田の紹介と語りが取り上げられている^{四五}。さらに二〇一七年から二〇一八年にかけて交流センターで開催された企画展「神戸から世界へ、世界から神戸へ！ブラジル移民の船上体験…神戸開港から世界一周航路まで」では幼少期の森田の経験が大きく取り上げられている。この企画展の監修にあたった根川幸男による森田への聞き取り調査の成果は、前掲の企画展のみならず、根川（二〇二三）など^{四六}に結実されている。

五 むすびにかえて

さて、戦前ブラジルに渡った日本移民の家族が、日本とブラジルが敵味方

に分かれた太平洋戦争をはさんで長期間に亘って分断されるという事態は、珍しいものではなかった。森田自身もそこに巻きこまれた典型といえる存在である。しかし当然ながらその経験をした者がそれをどう受け止め、その後の人生にどう位置付けて生きたかはそれぞれである。そのなかで森田は、戦後日本で暮らした七〇年以上、一貫してブラジル日本移民であったことを積極的に引き受けて生きたという意味で特徴的な人物といえる。森田はある種使命感のようなものを持ってブラジル移民経験者という旗を自ら高々と掲げ、研究者とも積極的に交わった。その結果森田は、ブラジル移民研究の貴重な情報提供者として研究者の間で知られるようになり、森田の持つ写真など一部の資料や語りは、さまざまな媒体上に残されている。それらは「子ども移民の記憶」や「カフェー・パウリスタ」など、調査者の関心に沿った調査から得られた証言データといえるだろう。一方で、本稿が紹介してきた資料や森田の活動歴は、森田が筆者とともに自らの人生をひとつひとつ振り返るなかで残された資料だと言える。森田は筆者とのやりとりを通じて、自らの過去の記録を掘り起こし、新聞記事や雑誌などさまざまな資料を収集し、さらにはそれらを博物館などへの寄贈というかたちで残すに至った。これらの資料群には、これまで主にブラジル移民研究者によって示されてきたものは別の視点や論点が潜んでいるように思われる。

今回の資料整理は筆者が調査者として調査するだけでなく、そこで得た知見や情報を整理し、地域に還元するという意味でも重要であった。二〇一四年に筆者が調査した際は、あくまで森田と資料の研究利用について合意形成をおこなったにすぎない。その資料が地域の資料保存機関に保管され、保存から公開、利用までを視野に整理されるということ、さらには自らが整理をするという立場になる、という発想には至っていなかった。一方、一調査者として、その成果を論文というかたちでのみ発表するのではなく、目録の作成や本稿のようなかたちで、調査過程で得た情報とともに記録することがで

きたのは幸いなことであつたように思う。筆者が調査を通じて得た資料（デジタルデータ）についても単なる複製物ではなく、後続の研究者が依拠する資料の一部として、いずれこの資料群に加えることが必要と考えている。

（むらなかだいじゅ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

【参考文献】

- アーカイブズ学用語研究会編（二〇二四）『アーカイブズ学用語辞典』柏書房株式会社
- 猪野正義（一九六四）『巨人 西原清東』西原清東先生頌徳碑建設期成会
- 一般財団法人日伯協会編（二〇一七）『神戸から世界へ、世界から神戸へ！ブラジル移民の船上体験 神戸開港から世界一周航路まで』〔図録〕 一般財団法人日伯協会
- 高知商工会議所創立百周年記念事業実行委員会編（一九九二）『高知商工会議所百年史―高知県経済 一世紀の歩み― 高知商工会議所
- 国立国会図書館（発表年不明）『第六章 日系社会の分裂対立（一）勝ち組と負け組』『ブラジル移民の一〇〇年』〈https://www.ndl.go.jp/brasil/s6/s6_1.html〉
- 佐川町立青山文庫編（二〇一九）『ブラジル移民の父 水野龍々』『舞楽而留への旅』〔図録〕 佐川町立青山文庫
- 清水邦俊（二〇一九）『文書整理の流れと人文研の個人資料について』〈<https://www.cenb.org.br/articles/display/447>〉
- 清水邦俊（二〇二四）『個人文書における概要調査の実践研究―サンパウロ人文科学研究所所蔵の個人文書を事例に―』『アーカイブ学研究』第四〇号〔抜刷〕
- 竹内四郎編（一九五一）『昭和26年版 高知縣商工案内』社団法人高知県商工会議所
- 寺尾紗穂（二〇一六）『カフェーパウリスタとブラジル移民 その2―その4―』『花椿 銀座時空散歩』資生堂『インターネット掲載記事』〈<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/ginza/214/>〉
- 〈<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/ginza/229/>〉
- 〈<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/ginza/239/>〉
- 根川幸男（二〇二三）『移民船から世界をみる…航路体験をめぐる日本近代史』一般財団法人 法政大学出版会
- 根川幸男（二〇一六）『ブラジル日系移民の教育史』みずす書房
- 馬場謙介（一九九九）『故郷なき郷愁』ブラジル日本文化協会・ニッケイ新聞社

原梅三郎（一九六二）『ブラジルを語る』五二出版

村中大樹（二〇一九）『高知から耕地へ、そしてコチアへ―「伯刺西爾行移民名簿」にみる高知県渡航許可移民の傾向―』『人文研』N o. 8 サンパウロ人文科学研究所

村中大樹（二〇二〇）『占領期（一九四五―五二年）におけるブラジル日本人移民二世の帰国支援運動―高知県における「ブラジル二世クラブ」の結成と展開―』『移民研究年報』二六号 日本移民学会

山下修平（二〇〇九）『高知県における海外移民の歴史…土佐市のブラジル移住を中心に』高知大学人文学部 国際社会コミュニケーション学科

【注釈】

一 配耕とは、当時の移民会社による造語であり、移民が耕地へ送り届けられることを意味する。ブラジル移民は家族単位の契約労働者であり、送られる先は移民取扱人の一種である移民会社によって決められていた。移民会社は現地の農園主からの要請数に従い移民を振り分けており、行き先を指定した「配耕表」が作成されていた。

二 村中（二〇一九）を参照のこと。

三 太平洋戦争前において、ブラジルからの「帰朝者」（復路の移民船の乗船者）がどの程度いたのか不明な点も多い。ブラジルでは一九三四年に「移民二分制限条項」を含む新憲法が、一九三八年には一四歳未満の児童に外国語教育を制限する法令が発布されたことにより、子どもに日本の教育を受けさせるため、義務教育年齢の子どもだけを帰国または渡航させる事例が存在した。帰国した子どもたちの一部は、戦後、ブラジルへ再渡航または帰国しており、彼／彼女らの存在は「帰伯二世」と呼ばれた。帰伯二世については馬場（一九九九）が参考になる。

四 社団法人高知県貿易協会は一九四九年（輸入は一九五〇年）の民間貿易の再開に先駆け、一九四七年六月二七日に創立されている。事務所は高知県商工会議所内に設置され、初代「会長」は商工会議所会頭の入交太蔵が就任した。高知商工会議所創立百周年記念事業実行委員会編（一九九一）、一八二―一八三頁。

五 ミノルタカメラ株式会社

六 オフィスオートメーション（Office Automation）機器の略。

七 佐川町立青山文庫編（二〇一九）、二八―三三頁。村中（二〇二〇）を参照のこと。

八 資料整理に関する基礎的な用語については、アーカイブズ用語研究会編（二〇二四）を参考にした。

九 日系社会シニア海外協力隊としてサンパウロ人文科学研究所の資料整理にあたったアーキビストの清水邦俊の説明によれば、物理的整理とは「文書からクリップ等の金属製留め具を外したり、クリーニングしたり、封筒等に入れる等、文書そのものに対する整理」のことを指し、情報的整理とは、「文書の記載内容やまとまり・ファイルごとの概要目録と、文書一点ごとの細目録を作成すること」とされる。清水（二〇一九）。なお、今回の資料整理ならび

一〇 本稿の執筆にあたっては清水の解説および論考に学ぶ点が多かった。

森田友和関係資料の特徴の一つが電子式複写による複製物（つまりコピー）の多さである。これについては、本人がOA機器の業界に携わってきたことと無関係ではないと考えられる。

二 本稿の執筆では、とくに第四章の③の記述において筆者が撮影したデータが参考になっている。

三 資料整理にあたってコンテキスト重視の考え方や課題の設定、ガイドの作成といった整理の進め方については、清水（二〇二四）が参考になっている。

四 今回の資料整理で細目録は、令和六年度の成果物として高知市立自由民権記念館に納めている。ただし、当面の間、インターネット上での公開はこなわず、館内利用に留めた。

五 搬入した資料には、移民関係書籍以外にも一般書籍が含まれていた。都合上、今回の資料整理には間に合っておらず、今後改めて対応が必要である。

六 いわゆる「同船者」または「同航者」。移民船は長期の航海においてネットワークを構築する場でもあり、目的地に到着後も相互扶助のうで大きな役割を果たした。根川（二〇二三）、一八―二〇頁。

七 馬場謙介、猪野博など。写真のなかの人物については森田への聞き取りを通じて知り得た情報が多く存在する（第四章に詳述）。

八 一八八七年四月二二日、高岡郡戸波村（現在の土佐市）出身。西原清東のテキサス開拓に影響を受け、一九〇六年に渡米、ウェブスターの西原農場へ向かう。戦後、帰国。『高知新聞』（一九七八年三月一三日）には、「高知県人移民活動の証言者」として紹介されている。なお、兄の片岡治義は「笠戸丸移民」（自由移民）としてブラジルに渡航している。

九 一八八四年二月二二日、高知市新田淵（現在の桜井町）出身。西原清東の長男。東京築地の立教中学校を卒業後、一九〇二年に渡米。父とともに西原農場の経営をおこなう。一九六三年二月には頌徳碑除幕式にあわせて帰国している。『高知新聞』（一九六三年二月一〇日）「十一年ぶり土佐へ 父の碑の除幕式に テキサスの『米作り王』」

一九 「森田友和宛書簡（差出人 大平清実）」（一九四六年一〇月二三日）

二〇 「森田国治宛書簡（差出人 馬場謙介）」（一九四七年五月九日）

二一 馬場（一九九九）を参照のこと。

二二 筆者が撮影した書簡の件数。今回資料整理で所在が確認できた書簡は五六通であつたことから一部が失われていると考えられる。

二三 日本敗戦を受け入れた当時の日系社会の指導者層が中心となり、その事実と日本が置かれた現状を「勝ち組（戦勝派）」の人びとに広めようとした運動。時局認識運動。運動に従事する人びとは「負け組（認識派）」と呼ばれた。国立国会図書館（発表年不明）

二四 前掲註一九

二五 たとえば、『高知新聞』（一九五〇年七月一九日）「『民主陛下』のお姿に感激ブラジルで「土佐路の春」を参照。南国高知産業大博覧会を契機にブラジルへ送られた巡幸映画「土佐路の春」がブラジルで上映され、「非常な感激をよんでいる」等、現地の様子が「コチア産業組合理事大平清実氏」から「県商工会議所内ブラジルクラブ森田友和氏のもとへ郵便でもたらされた」旨報道されている。

二六 佐川町立青山文庫編（二〇一九）、二六頁。

二七 種田家は水野龍の再婚相手である万亀夫人の実家で、水野が日本に滞在中は万亀夫人の姉が身の回りの世話をしていた。前掲註二四、同頁。

二八 原（一九六二）、三二〇―三二五頁。

二九 佐川町立青山文庫編（二〇一九）、三三頁を参照のこと。なお、原（一九六二）の三二三頁の記述には、「高知のわかい者」として森田の存在が確認できる。

三〇 『高知新聞』（一九五〇年四月六日）「『骨を埋める覚悟』第二の故国ブラジルへ 移民の父・水野翁きのう離高」

三一 「森田友和宛書簡（差出人 竹内昭三）」（一九五〇年二月一七日）。ただし、この書簡については原資料の所在が確認できておらず、筆者撮影のデータより参照した。

三二 『高知新聞』（一九五一年一〇月二三日）「ブラジルを語るハッ 本社座談会めざましい県人の進出 金もうけに勝組を利用」

三三 『高知新聞』（一九五二年一月二九日）「日伯親善に貢献 本県ブラジル2世クラ

ブ解散

三四 昭和二六年版の『商工案内』をみると、館内団体のなかに「高知ブラジル協会」の存在が確認できる（竹内編 一九五一、二六頁）。しかしながら、どのような活動を行っていたのか等の確認はとれていない。

三五 一八七三年一〇月二五日、高岡郡北地（現在の土佐市）出身。須崎町長（一九二八―一九三八年）や蓮池村長（一九五二―一九五四年）など歴任。退職後に郷土史研究会の育成指導にあたる。

三六 猪野（一九六四）、一六四―一六八頁。

三七 『高知新聞』（一九六三年二月一三日）「故西原氏頌徳碑の除幕式」

三八 一八七五年一月、京都府出身。東京専門学校（現在の早稲田大学）卒業後、一八九七年に外務省入省。書記生としてフィリピン、メキシコ、ペルーで勤めた後、チリやブラジルの公使館、大使館で通訳官や書記官など歴任。スペイン語とポルトガル語に精通し、多くの著作がある。

三九 本人の証言によれば、一九七六年のロッキード事件で田中角栄が逮捕された直後に二度目の渡伯を果たしている。また、一九七五年から二〇〇三年頃までの間、三度目、四度目となる渡伯をしているが詳細はよくわかっていない。

四〇 『サンパウロ新聞』（二〇〇八年六月二八日）「純粋に移民のために闘った人 誤ったイメージ払拭願う 水野龍氏を語る森田友和さん」、『サンパウロ新聞』（二〇〇八年七月三二日）「行間に家族への心情切々と―水野龍翁の真筆書簡（コピー）／万亀夫人や友人に送った五冊分 森田友和氏が持参」

四一 前掲註二六、一九頁。

四二 『高知新聞』（二〇〇九年八月二五日）「水野龍（佐川町出身）の手紙／崎山比佐衛（本山町）の日記 ブラジル移民史料を寄贈 青山文庫や県立歴史館に子孫ら「新たな研究期待」

四三 山下（二〇〇九）

四四 一般財団法人日伯協会編（二〇一七）

四五 寺尾（二〇一六）

四六 根川（二〇二三）、二一四―二二二頁。このほか森田の語りは根川（二〇一六）、四五二頁でも取り上げられている。